

いよいよ本年度の最後を飾る企画展、円山応挙展の準備も最終段階になってきました。そうです、作品が展示室に並び始めました。数年前に企画案が館内会議に提案され、内容はもちろんのこと、どのような枠組みでやるのか、時期はいつか、予算はどうするかなどについて検討し、開催する方向になってからも、どのような人たちの協力が得られるのか、借用先の協力は得られるのかなど、様々な問題を解決しながらようやく作品展示まで至りました。担当者は展示作業が始まってからも、ぎりぎりまで作品借用に出かけたり、もちろん図録制作と並行しながらの作業、また、音声ガイドの原稿チェックやグッズ販売についても目配せしながら、さらには協賛者への対応など、本当にいつもながら舞台裏では様々な作業が進められています。



今回の展覧会の見どころのひとつに、重要文化財である大乗寺の障壁画の展示があります。前のブログでもお伝えしましたが、単にケース内に並べるのではなく、実際の客殿のような再現展示をめざし、こだわりのディスプレイがなされています。さらに照明についても、単一ではなく、朝、昼、夕の自然の光の違いを体感して頂けるように、パナソニックの協力により LED ライトを使用した変化にとんだ照明を準備しています。

企画協力をいただいた明治学院大学の山下裕二教授も述べられていましたが、じっくり見ていると光の変化が孔雀の立体感をより増して、応挙の狙いが分かる気がします。



写真は天井部分にある今回の為の特別な照明設備で、郭子儀図襖を照らすところです。郭子儀図襖といえはちょうど2月22日付の新聞各紙には、小学館の日本美術全集の発売の大きな広告が出ていました。そこにこの襖絵の写真が使われていました。ご覧になった方も多いと思いますが、今は愛知県美術館で本物を見ることができます。





ほかに、作品保存には細心の注意を払い、たとえば、密閉のケースでは調湿剤といって、ケース内の湿度を一定に保つ役割を持ったものを来館者の目に届かないところに入れてあります。もちろん展示室そのものは全国の美術館の中でもトップクラスの空調管理を行っていて、温度、湿度を一定に保っています。



さて、円山応挙展の準備ばかり取り上げてきましたが、愛知県美術館では企画展ごとにコレクション展の展示内容も大きく展示替えをしています。次のブログでその紹介もしたいと思いますが、ここではまず昨年の4月以降はじまった若手作家を展示室6で紹介するシリーズ APMoA Project, ARCH のことに触れておきます。



今回の作家は佐藤香菜さんです。愛知県生まれで、沖縄県立芸術大学で学んだ彼女の作品は一見するとオーソドックスな平面作品ですが、よく見ると刺繍も使われ、ペインティングの強さと装飾性が融合した独自の世界を作っています。



展示では、担当の大島学芸員といっしょによりよい展示を目指して、数センチ単位の微妙な移動を重ねながら位置決めをしていました。出来上がりは是非会場でご覧になってください。お楽しみに。

(ST)

